

平安京右京三条一坊十・十五町跡

2002年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京三条一坊十・十五町跡

2002年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しております。また、平安京遷都以来今日に至るまで都市として生活が営まれてきており、各時代の生活跡が連綿と重なり合っています。都であるゆえにそこから発見されるその一つ一つは、日本の歴史を語るうえで欠くことのできないものとなっています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした遺跡の発掘調査を通して京都の歴史の解明に取り組んでおります。その成果を市民の皆様に広く公開し活用いただけるよう進めていくことが研究所の責務と考えております。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、出土遺物の小中学校や公的施設での貸出展示、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところであります。

さて、当研究所では従来各年度毎に総括・報告してまいりました「京都市埋蔵文化財調査概要」の刊行を改め、平成13年度調査分より各調査箇所毎に1冊の報告書として発刊しております。その第2冊目としてこのたび御池通西進工事に伴います平安京跡の発掘調査のうち平成13年度調査の成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援をたまわりました関係者各位に対して、厚くお礼ならびに感謝を申し上げます次第です。

平成14年4月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京右京三条一坊十・十五町跡
- 2 調査所在地 京都市中京区西ノ京船塚町他地内
- 3 委託者及び承諾者 京都市 代表者 京都市長 榎本頼兼
- 4 調査期間 2001年 6 月 4 日～2001年 8 月24日
- 5 調査面積 約204m²
- 6 調査担当職員 大立目 一
- 7 使用地図 京都市都市計画局発行の地形図(1 : 2,500)「壬生」を調整して使用した。
- 8 使用方位・座標値 平面直角座標系 (ただし、単位(m)を省略した)
- 9 使用標高 T.P. : 東京湾平均海面高度(座標および標高は、京都市遺跡測量基準点を使用した)
- 10 遺構番号 調査区ごとに通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
本書用例 SB : 建物、SD : 溝、SE : 井戸、SK : 土壌、SX : 不明、
P : 柱穴
- 11 遺物番号 挿図の土器類・石製品・木製品・瓦類の順に通し番号を付した。
- 12 掲載写真 村井伸也・幸明綾子
- 13 作成担当職員 大立目 一

目 次

1 . 調査経過	1
2 . 周辺の調査	2
3 . 遺 構	3
(1) K - 3区(十五町)の調査	3
(2) M区(十町)の調査	5
(3) L区(十町)の調査	5
4 . 遺 物	9
(1) K - 3区出土遺物	9
(2) M区出土遺物	9
(3) L区出土遺物	9
5 . まとめ	17

挿 図 目 次

図 1 調査位置図	1
図 2 L区調査前全景	2
図 3 M区調査前全景	2
図 4 調査区配置図	2
図 5 K - 3区実測図	3
図 6 M区実測図	4
図 7 L区実測図	6
図 8 SE80実測図	7
図 9 SE140実測図	8
図10 L区出土遺物実測図	10
図11 L区出土遺物実測図	12

表 目 次

表 1 遺構概要表	8
表 2 SE80土器構成表	11
表 3 SE140土器構成表	13
表 4 遺物概要表	16

図 版 目 次

- 図版 1 遺跡 1 K - 3 区全景 (西から)
2 K - 3 区SD 3 ~ 5 (北から)
3 K - 3 区路面 (西から)
- 図版 2 遺跡 1 M区全景 (北から)
2 L 区第 2 面全景 (西から)
- 図版 3 遺跡 1 L 区第 3 面全景 (東から)
2 L 区SE80 (北から)
- 図版 4 遺跡 1 L 区SE140甕埋設状況 (北西から)
2 L 区SE140完掘状況 (南西から)
3 L 区SE140遺物出土状況
- 図版 5 遺物 SE80出土遺物
- 図版 6 遺物 SE80・140出土遺物
- 図版 7 遺物 SK39 P52・115 平安整地第 2 層出土遺物

平安京右京三条一坊十・十五町跡

1. 調査経過

今回の調査は、1.3.8 御池通道路改良工事に伴う発掘調査で、1997年から行なわれてきた一連の調査では最後となる。

今年度の調査地は、京都市中京区西ノ京船塚町・永本町の御池通に面した北側部分で、御前通から太平通のやや東までの区間で平安京右京三条一坊十町・十五町に位置する。調査予定区の西端調査区のK - 3区で西大宮大路東築地・東側溝とそれに伴う路面が、L区・M区においては宅地における建物跡等の検出が予想された。

調査区は御前通と御池通の東北角の南端地区をK - 3区(東西11m×南北4.5m、約50㎡)、下ノ森通～太平通間の太平通寄りの地区をL区(東西21m、南北6m、約126㎡)、御池通と太平通の北東角をM区(東西4m、南北7m、約28㎡)とした。各区の調査区を合計すると、204㎡となる。調査はK - 3区から開始し、その後にL区、M区を併行して行なった。

調査の結果、K - 3区では平安時代の西大宮大路の路面整地層・土壌状遺構・ピットなど、西大宮大路東築地中心線上で室町時代後期の南北溝を検出することができた。M区では近世の土取りなどにより攪乱を受け、落ち込み遺構の一部と小ピットを検出したにとどまる。L区では平安時代前期から中期にかけての建物跡・柱穴・溝・井戸等を検出することができた。また、遺物では、L区の各遺構より平安時代前期から中期初頭にかけての遺物が多数出土した。

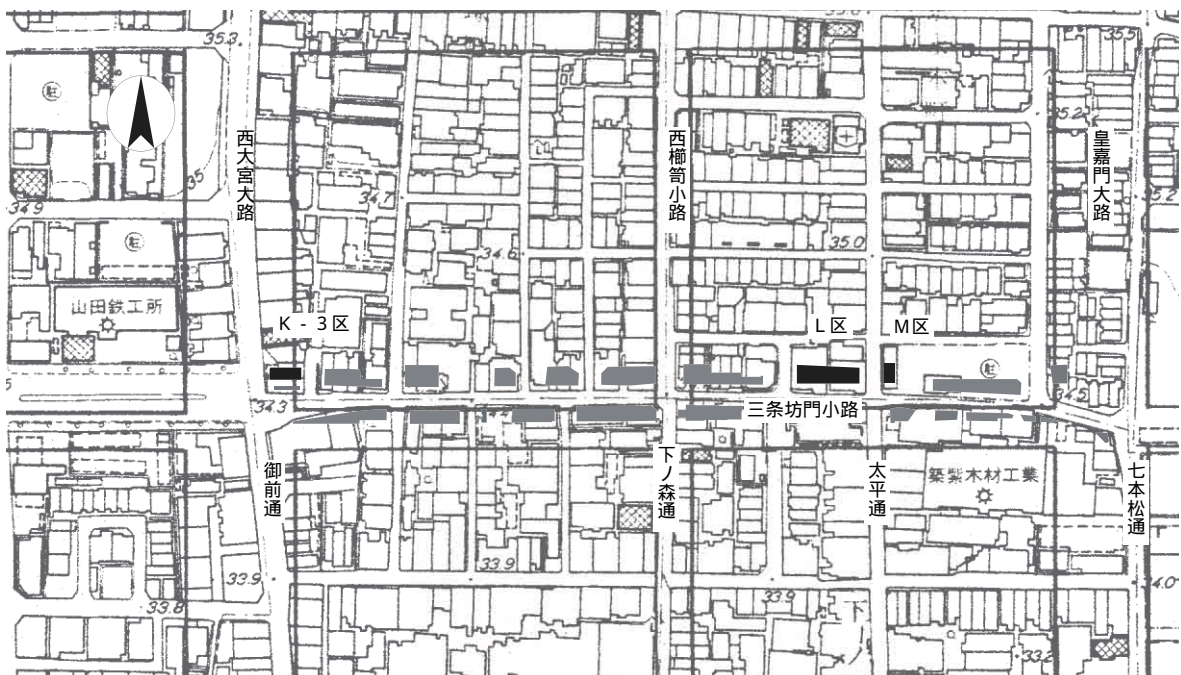


図1 調査位置図(1:2,500)

2 . 周辺の調査

当工事に伴う発掘調査は、1997年から2000年度にかけて実施したものである。調査地点周辺のこれまでの発掘成果は以下のとおりである。1997年の調査¹⁾では皇嘉門大路東側溝及び路面が、1998年の調査²⁾では皇嘉門大路西側溝及び路面、西櫛笥小路西側溝、園池遺構、柱穴等が、1999年の調査では三条坊門小路北側溝及び路面等が、2000年の調査では西櫛笥小路路面及び東側溝、埋納遺構、西大宮大路路面、柱穴等がそれぞれ検出されている。



図2 L区調査前全景



図3 M区調査前全景

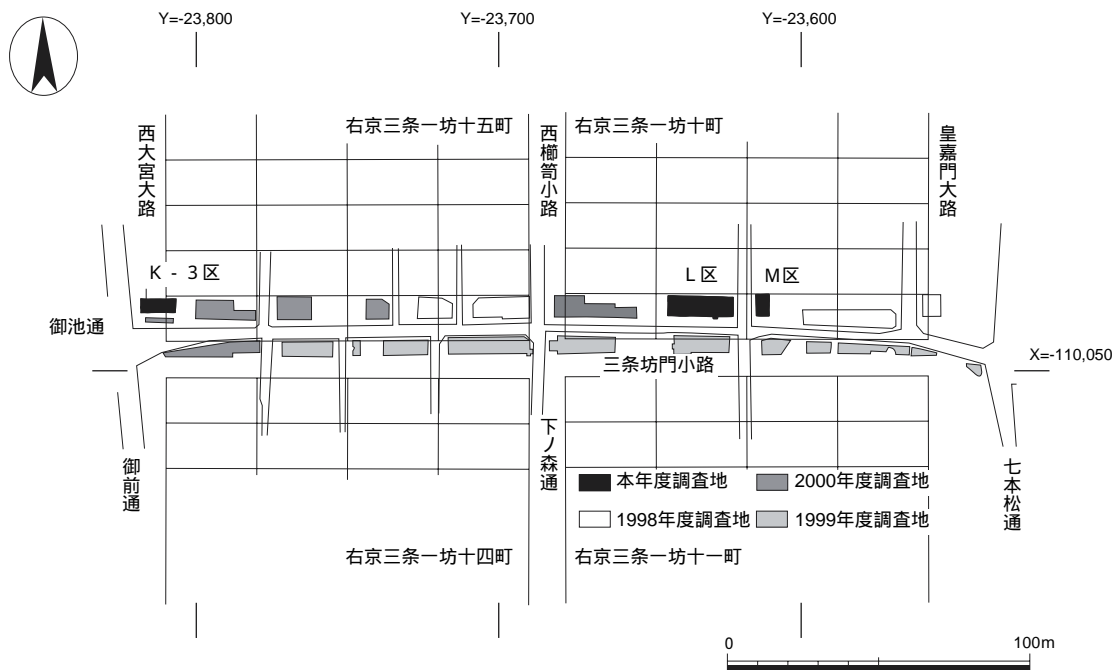


図4 調査区配置図(1 : 2,500)

3. 遺構

調査区は3箇所に別れているため、各調査区ごとに遺構の概要を述べる。

(1) K - 3区(十五町)の調査

K - 3区は東部が十五町の東四行北八門に位置し、西に西大宮大路東築地心が南北に延長する

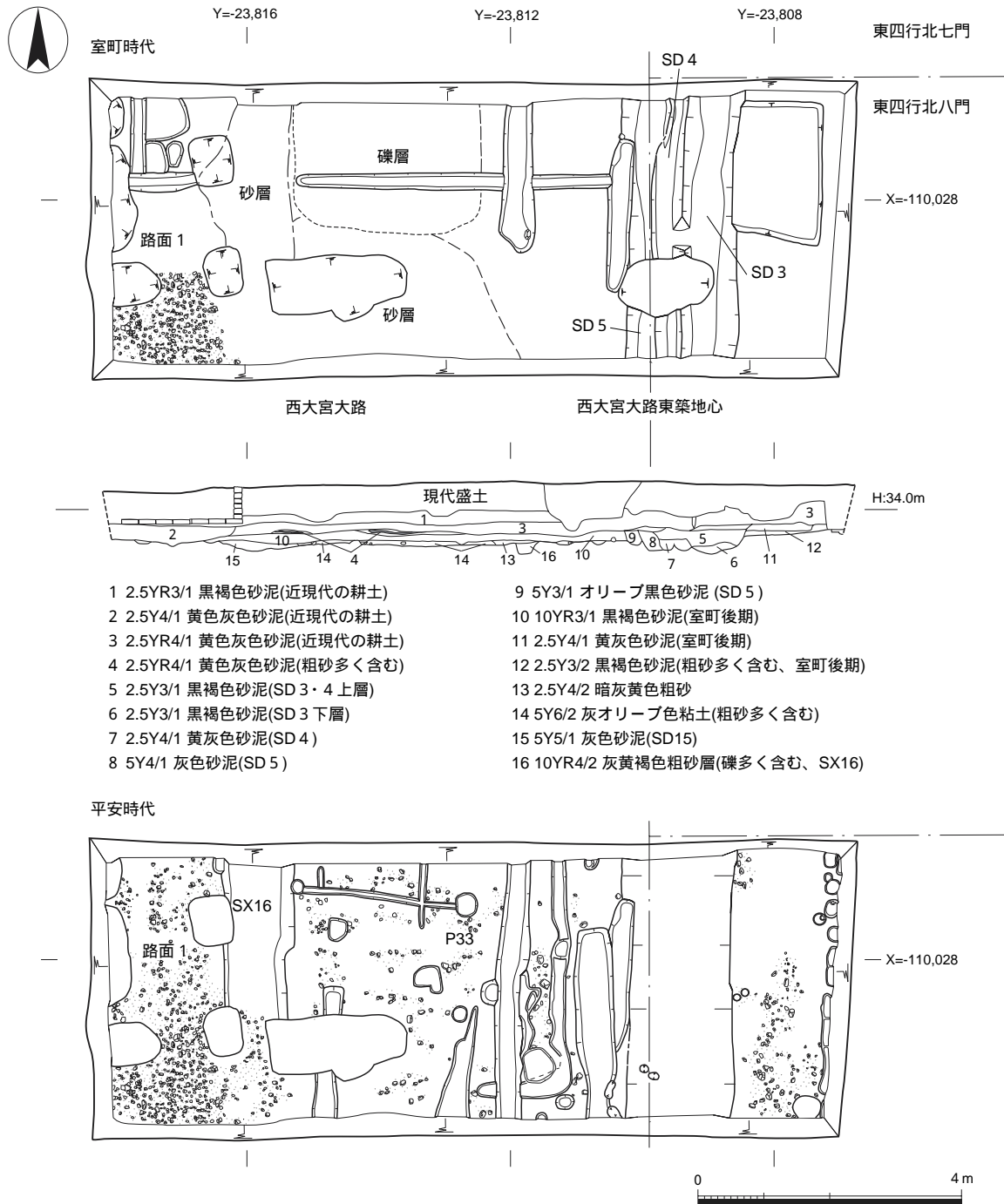


図5 K - 3区実測図(1:100)

ことが想定できることから、同大路の築地・東側溝・路面跡の検出を主要な目的として、調査区は東西方向に設定した。調査区は近現代の耕作及び宅地造成などにより攪乱を大きく受けていたため、耕作土層直下は中世の遺物を含む堆積層と地山であり、遺構面は2時期あった。

基本的な層序は、地表下0.45mまでは現代盛土層、以下、0.45～0.7mが近現代の耕作土(黒褐色砂泥)層、0.7～0.85mが中世の遺物を含む黒褐色砂泥層、黒褐色砂泥層下0.85～0.95mが路面状の整地層となり、整地層直下は地山(明褐色砂泥)となる。以下検出した遺構について述べる。

検出した遺構には近世から平安時代のものがみられる。

近世には耕作地であったと思われる、耕作土層以外に近世遺構は確認できなかった。遺物は耕作土層などからわずかに出土したにとどまる。

室町時代後半に属する遺構には、溝・整地層・路面などがある。南北溝(SD3・4・5)は、西大宮大路東築地心の該当位置で検出した。溝の東肩からトレンチ東端にかけて粗砂を固めて整地された整地層を検出した。また、調査区の南西部で径3～4cmの礫を敷き詰めた路面整地層1、中央南部でも削平を受け礫はまばらではあるが同様の路面整地層を検出できた。15世紀後葉から16世紀前半代の遺物が出土した。従って、西大宮大路路面は、中世においても削平を受けながらも機能を果たしていたと想定している。また、調査区中央部全体に粗砂層・微砂層が路面整地層上面に堆積

していた。これは出水時に流れ込んだものと思われる、西大宮大路に沿って流れていたとされる西大宮川が当該期にも機能していたとすれば、同河川の氾濫堆積とも考えられる。

平安時代に属する西大宮大路の東側溝・築地跡等は、前年度調査のK-2区と同様、検出できなかった。平安時代に属する遺構には、土壇状遺構・ピットなどがある。調査区東端で検出した中世の整地層下に堆積する黄褐色砂泥(地山)上面で、まばらではあるが河原石が埋め込まれた石埋め込みの窪みが不規則に並ぶ遺構を検出し、また石埋め込みの東限から東に落ち込む土壇状遺構及びピットも検出している。これらは目的としていた築地位置からは大きく東に外れるので、築地基底部の地業ではないと考えている。前年度調査で検出された園池遺構(K-1区のSG59あるいはH区のSG67)に

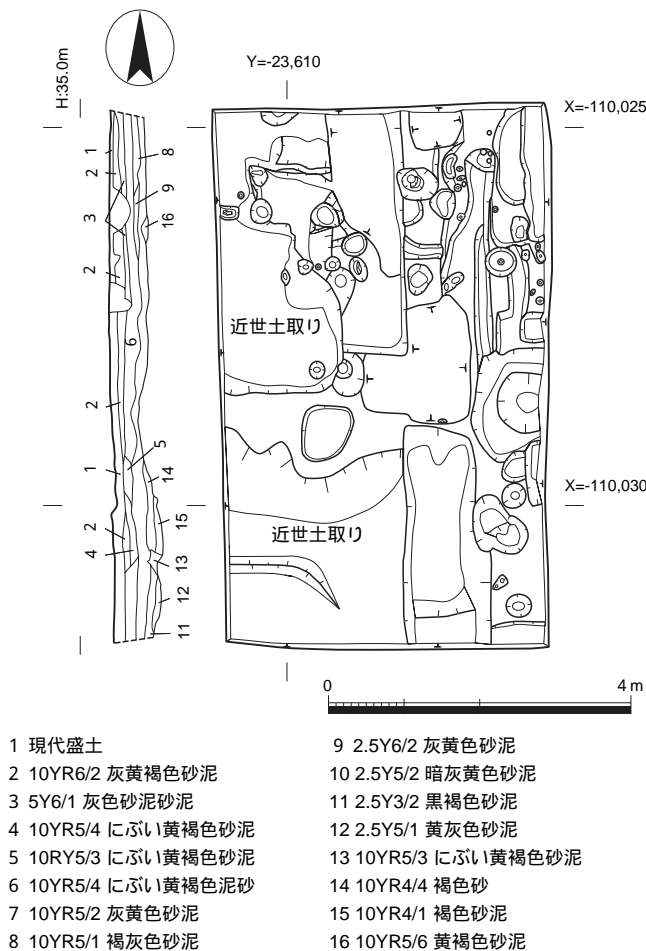


図6 M区実測図(1:100)

関連する東に傾斜する洲浜の西肩の一部とも考えられるが、以東は調査区外であり明確な位置付けはできない。

(2) M区(十町)の調査

調査区は十町内の東二行北八門に位置する。面積は狭いが宅地内に位置することから、宅地関係の遺構の検出が期待できた。調査では、耕作土直下で平安時代・中世の遺物を包含する土層を検出したが、最終的に後世に攪乱を受けた層と確認でき、大きな成果は得られなかった。

基本的な層序は、地表面下0.1mまでは現代盛土層、0.1～0.2mが近世の耕作土層(灰黄褐色砂泥)、0.2～0.5mが近世に掘込まれた土層(にぶい黄褐色砂泥)で、近世の耕作土層直下は黄褐色砂泥の地山となる。なお、にぶい黄褐色砂泥や暗灰黄色砂泥は、平安時代や中世の遺物を包含するが、近世の土層であることが判明した。以下検出した遺構について述べる。

近世に属する遺構には、土取状の落ち込み、土壌などがある。土取状の遺構には黒褐色砂泥・黄灰色砂泥・褐色砂泥層などが堆積する。

中世に属する遺構は近世の土取りなどにより攪乱を受けほとんど検出できなかった。

平安時代に属する遺構も同様に、近世の土取りなどにより攪乱を受け、削平を免れた北西部で落ち込み遺構の一部および小ピットを検出したにとどまる。なお、次に述べるL区東半部で検出した平安時代の小礫を多量に含む整地層も検出できなかった。

(3) L区(十町)の調査

調査区は十町内の東三行北八門に位置する東西方向のトレンチで、調査区全体が1戸主内におさまること、また調査区の西に隣接する前年度調査のI-2区では平安時代中期の柱穴群が検出され、遺物にも注目すべき成果が挙げられていることから、同様の成果が期待できた。

調査区は近現代の宅地造成などにより攪乱・削平を受けてはいたが、近世の耕作土層直下から平安時代の整地土層と思われる小礫と遺物を多く含んだ土層面を東部から中央部にかけて検出した。北部も平安時代の遺物を包含した土層(暗褐色砂泥)が続き、平安時代の遺構の遺存状態は良好であった。以下検出した遺構について述べる。

基本的な層序は、地表面下0.1mが現代盛土層、0.1～0.25mが近世の耕作土層(褐灰色砂泥)、0.25～0.3mが平安時代中期前半の宅地内整地層(第1層・灰黄褐色砂泥(小礫混))、0.3～0.4mが平安時代前期後半の宅地内整地層(第2層・褐色砂泥(炭混))、0.4～0.5mが平安時代前期の土層(第3層・黒褐色粘質土)が堆積し、黒褐色粘質土直下が地山の明黄褐色砂泥となる。

近世に属する遺構は、平安時代の整地層上面で土取穴、耕作溝などを検出した。

中世に属すると決定できる遺構は検出できなかった。また遺物も非常に少ない。

平安時代前期から中期の遺構には、建物・井戸・溝などがある。

SB1

調査区の中央から西部にかけて検出した掘立柱建物で、一部の柱穴は後で述べるSD109の上面で

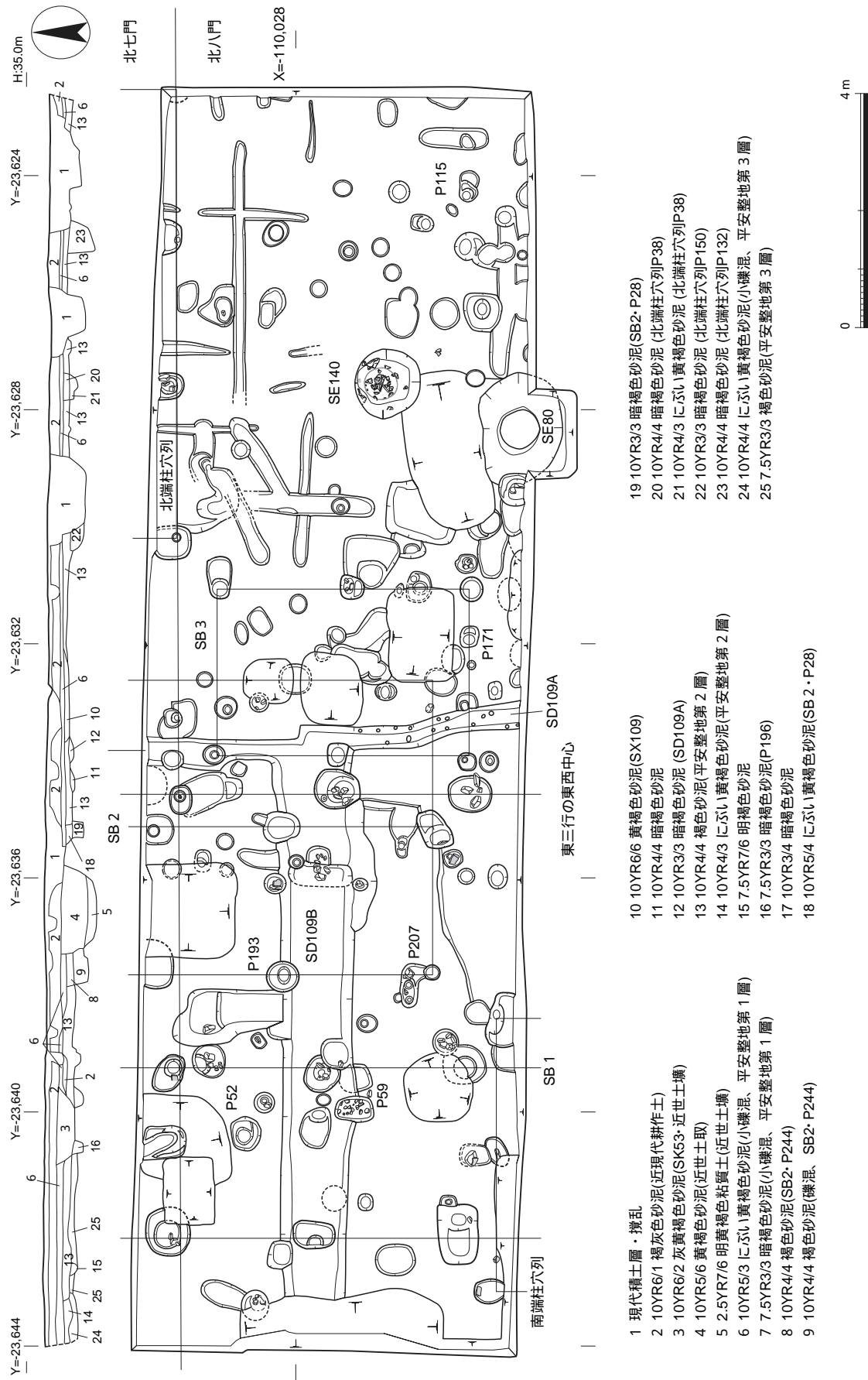


図7 L区実測図(1:100)

- 1 現代耕土層・攪乱
- 2 10YR6/1 褐灰色砂泥(近現代耕作土)
- 3 10YR6/2 灰黄褐色砂泥(SK53:近世土壌)
- 4 10YR5/6 黄褐色砂泥(近世土取)
- 5 2.5YR7/6 明黄褐色粘質土(近世土壌)
- 6 10YR5/3 に近い黄褐色砂泥(小礫混、平安整地第1層)
- 7 7.5YR3/3 暗褐色砂泥(小礫混、平安整地第1層)
- 8 10YR4/4 褐色砂泥(SB2・P244)
- 9 10YR4/4 褐色砂泥(礫混、SB2・P244)
- 10 10YR6/6 黄褐色砂泥(SX109)
- 11 10YR4/4 暗褐色砂泥
- 12 10YR3/3 暗褐色砂泥(SD109A)
- 13 10YR4/4 褐色砂泥(平安整地第2層)
- 14 10YR4/3 に近い黄褐色砂泥(平安整地第2層)
- 15 7.5YR7/6 明褐色砂泥
- 16 7.5YR3/3 暗褐色砂泥(P196)
- 17 10YR3/4 暗褐色砂泥
- 18 10YR5/4 に近い黄褐色砂泥(SB2・P28)
- 19 10YR3/3 暗褐色砂泥(SB2・P28)
- 20 10YR4/4 暗褐色砂泥(北端柱穴列P38)
- 21 10YR4/3 に近い黄褐色砂泥(北端柱穴列P38)
- 22 10YR3/3 暗褐色砂泥(北端柱穴列P150)
- 23 10YR4/4 暗褐色砂泥(北端柱穴列P132)
- 24 10YR4/4 に近い黄褐色砂泥(小礫混、平安整地第3層)
- 25 7.5YR3/3 褐色砂泥(平安整地第3層)

検出している。SB 1 は北および南へはさらに調査区外へ広がるため全体の規模は不明である。現存での柱穴の検出状況から、桁行 2 間以上、梁行 2 間の身舎に西庇の付く南北棟と考えられる。柱間は桁行・梁行とも 2.4m の八尺等間、庇の出は 2.8m で約九尺と想定される。建物の時期は、遺物から 9 世紀後半から 10 世紀初頭を考えている。

SB 2

調査区中央部やや西寄りで見出した総柱建物であるが、東柱列北端の柱穴は検出できなかった。桁行 2 間以上、梁行 2 間の建物と考えているが、北端は調査区外へ広がる可能性もあり、規模ははっきりしない。柱間は桁行・梁行とも 2.4m の八尺等間である。建物の時期は遺物から SB 1 よりも少し古く 9 世紀後半を考えている。柱筋は SB 1 と並行しており、北に対してやや西に振れる。

SB 3

調査区中央に位置し、SB 2 のすぐ脇に隣接するやや小規模な掘立柱建物である。SB 1 と同様、一部の柱穴は SD109 の上面で検出している。規模は桁行 2 間、梁行 1 間の南北棟として復原したが、北・南へはさらに調査区外へ広がる可能性も残されている。柱間は桁行が 2.4m の八尺等間、梁行は 2.8m の九尺である。建物の時期は、出土遺物から SB 2 とほぼ同時期と考えている。

このほか、建物に復原できる可能性のある柱穴列がある。調査区東部の北端では、SB 1 と柱筋を同じくする東西方向の柱穴列がある。また調査区西部南端にも東西方向の柱穴列がある。どちらも調査区の北限と南限に位置しており全体像はつかめなかった。遺物から見て SB 2・3 と時期が併行するものとする。また上記柱列以外にも柱穴は多数検出しており、何度も建て替えられた結果と思われるが復原には至っていない。

SE80

調査区東部の南端で見出した円形曲物組井戸である。掘形平面形は東西に長い楕円形を呈し、上端の東西径は 1.7m、底部の径は 0.5m、深さは 0.9m ある。検出面から 0.3m 付近で井戸側に使用された 2 段目と考えられる曲物の痕跡を確認した。また、検出面から 0.5m 付近で 1 段目になると考えられる曲物を検出した。1 段目の曲物の規模は、径約 65cm、高さ約 40cm ある。2 段目の曲物も 1 段目と規模をおそらく同じくするものであると考えられる。1 段目の曲物の下端には径 2 ~ 3 cm の小礫を巡らせて、曲物の下端内側の地山上面には拳大の石を張り付け、また、曲物の掘形側には径 10cm 前後の河原石を曲物下端外側を補強するために据え付ける。出土遺物から、9 世紀中

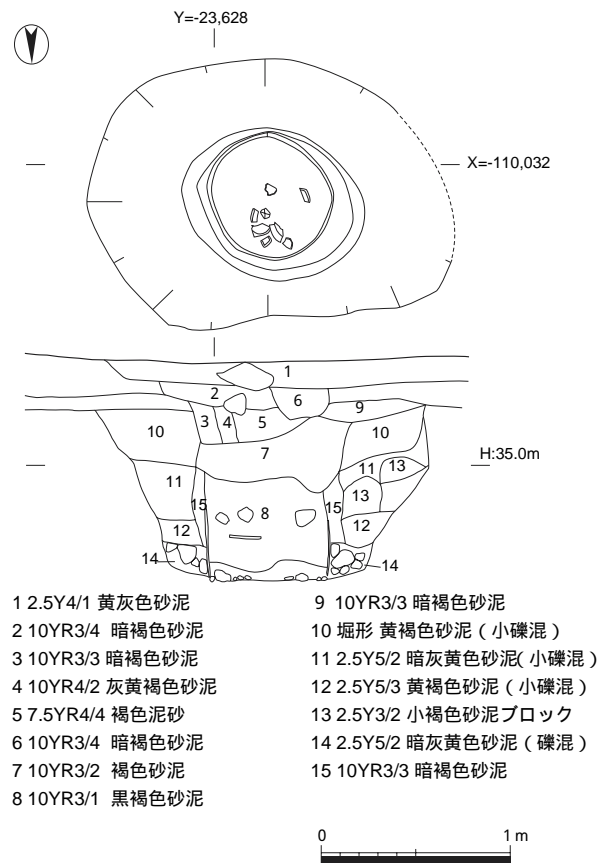


図 8 SE80実測図

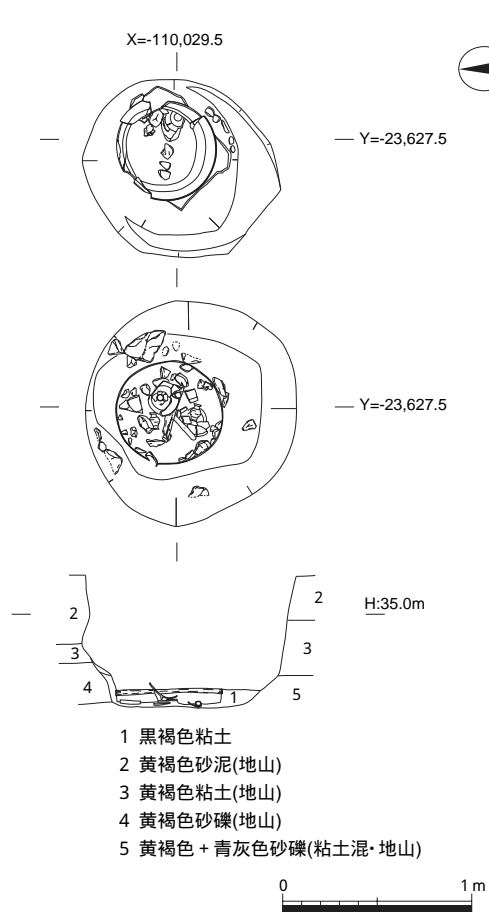


図9 SE140実測図
(平面図 上：甕埋設状況 下：完掘状況)

頃には機能し、9世紀後半には埋められたと考えている。建物SB2・3に關係する井戸であろうと考えられる。

SE140

調査区東部のSE80の北で検出した円形曲物組井戸である。掘形は南西部を近代攪乱により削平を受けているが、ほぼ円形を呈し、上端の径が約1.3m、底部の径0.7m、深さは0.7mある。検出面から0.1~0.2m下部で、須恵器の甕を検出した。甕は口縁から肩部にかけて残存しており、欠けてはいるが口縁は全周する。甕の口縁部を転用し、曲物組と組み合わせた構造であろうと考えている。また検出面から0.6m下部で径55cm、高さ2~3cmの遺存する曲物を検出した。上半部ではほとんど曲物の残存を確認できなかったが、SE80と同様、2段の曲物を据えた構造を有した井戸と考えている。

井戸の底面には、端部が焦げた2片の薪片が据え置かれていた。薪片の上には、猿投産の緑釉陶器陰刻花文輪花稜椀1個体と須恵器の瓶子が2個体が据え置かれていた。これらの出土状況は、井戸を埋める

時の祭祀を示すものと考えている。出土遺物から、10世紀初頭にかかる井戸と想定しており、SE80を埋めた後に作り替えられたと考えている。建物SB1に關係する井戸であろうと想定される。

SD109

調査区中央部から西部にかけてT字型の溝SD109A・Bを検出した。中央部で検出した南北溝SD109Aは、南北方向とも調査区外へ延長する。SD109Aの規模は、幅が0.4~0.5m、深さ0.05~0.07mで、底面は南に僅かに傾斜している。南半部の両肩の落ち口と下端中央付近で杭跡を検出しており、護岸か橋に伴う施設の一部であろう。東西溝SD109Bの規模は、幅が約1.2m、深さ0.14~0.18mで、底面は西へ傾斜している。

表1 遺構概要表

時期		遺構		
		L区	K-3区	M区
平安時代	期新	SD109	路面	
	古~古期	SB1・SB2・SB3・SE80・SE140・SD109・ピット・土塙・小溝	路面・SX16	ピット
室町時代	期		路面・SD3・SD4・SD5・ピット・土塙・小溝	
江戸時代	期以降	SK19・SK37・SK53・SK78・暗渠	小溝	土取・土塙・小溝・暗渠

4 . 遺 物

遺物は整理箱にして82箱出土したが、大半はL区から出土したもので、63箱に達する。出土遺物の時期は平安時代前期から中期にかかるものであった。また中世から近世の遺物は、K - 3区を除き遺構や包含層が未検出であったことから、わずかしが採取できなかった。遺構に伴うまとまった遺物はL区のSE80・140とSD109A・Bがあげられ、L区整地層の各層からも形式的にまとまった遺物を得ることができた。

(1) K - 3区出土遺物

近世の遺物は、近現代の耕作土層から国産施釉陶器などがわずかに出土した程度で、土師器類はほとんど出土しなかった。

中世の遺物は、SD3・4・5から室町時代後半(新～古期³⁾)の遺物が出土した。内容は土師器・中世須恵器・美濃瀬戸の灰釉陶器・輸入青磁・瓦などがある。また中世の整地層からも美濃瀬戸おろし皿・天目茶椀・足付き盤・備前鉢・信楽鉢等の破片が出土しているが、土器数量は少なかった。土器以外では「熙寧元寶」と思われる北宋銭がP33より出土している。

平安時代前期から中期(新～古)の遺物は、西大宮大路の路面から土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦などが、SX16からは土師器・須恵器・緑釉陶器・黒色土器・瓦などが出土している。

(2) M区出土遺物

近世の遺物は、M区から18世紀代の伊万里の染付椀、18世紀末から19世紀の京焼陶器などが土取穴から出土しているが、特出できるものはない。中世の遺物は、天目茶椀(美濃瀬戸)、青磁椀、青白磁、焼締陶器甕、擂鉢などの小片が僅かに出土し、同じく特出できるものはない。

平安時代前期後半から中期前半の遺物は、M区では近世に削平され掘込まれた土層より平安時代の土師器・須恵器・緑釉陶器が近世の土層に混入して出土している。また、地山上面で検出したピットから土師器・須恵器・緑釉陶器などが出土したが、量は少ない。

(3) L区出土遺物

L区における近世遺物は土取穴から平安時代の遺物に混じって京焼陶器が出土し、中世遺物は土取穴から出土している。遺物は、天目茶椀(美濃瀬戸)、青磁椀、青白磁、焼締陶器甕、擂鉢などの小片がわずかに出土した。平安時代前期から中期(新～古)の遺物は主に整地層、SE80・140、SD109、SB1・2・3や他の柱穴群、土壌などから土器類が多数出土した。土器類には土師器(椀・杯・皿・甕・高杯・盤・製塩土器)、須恵器(杯・杯蓋・甕・鉢・壺)、緑釉陶器(椀・小壺・四足壺・火舎)、灰釉陶器(椀・皿・段皿・壺)、白色土器(皿)、黒色土器(椀・鉢・甕・風字硯)、越州窯青磁(椀)、白磁(椀)などの器種器形がある。大半は9世紀後半から10世紀前半代の遺物であるが、SE80出土のものは9世紀中

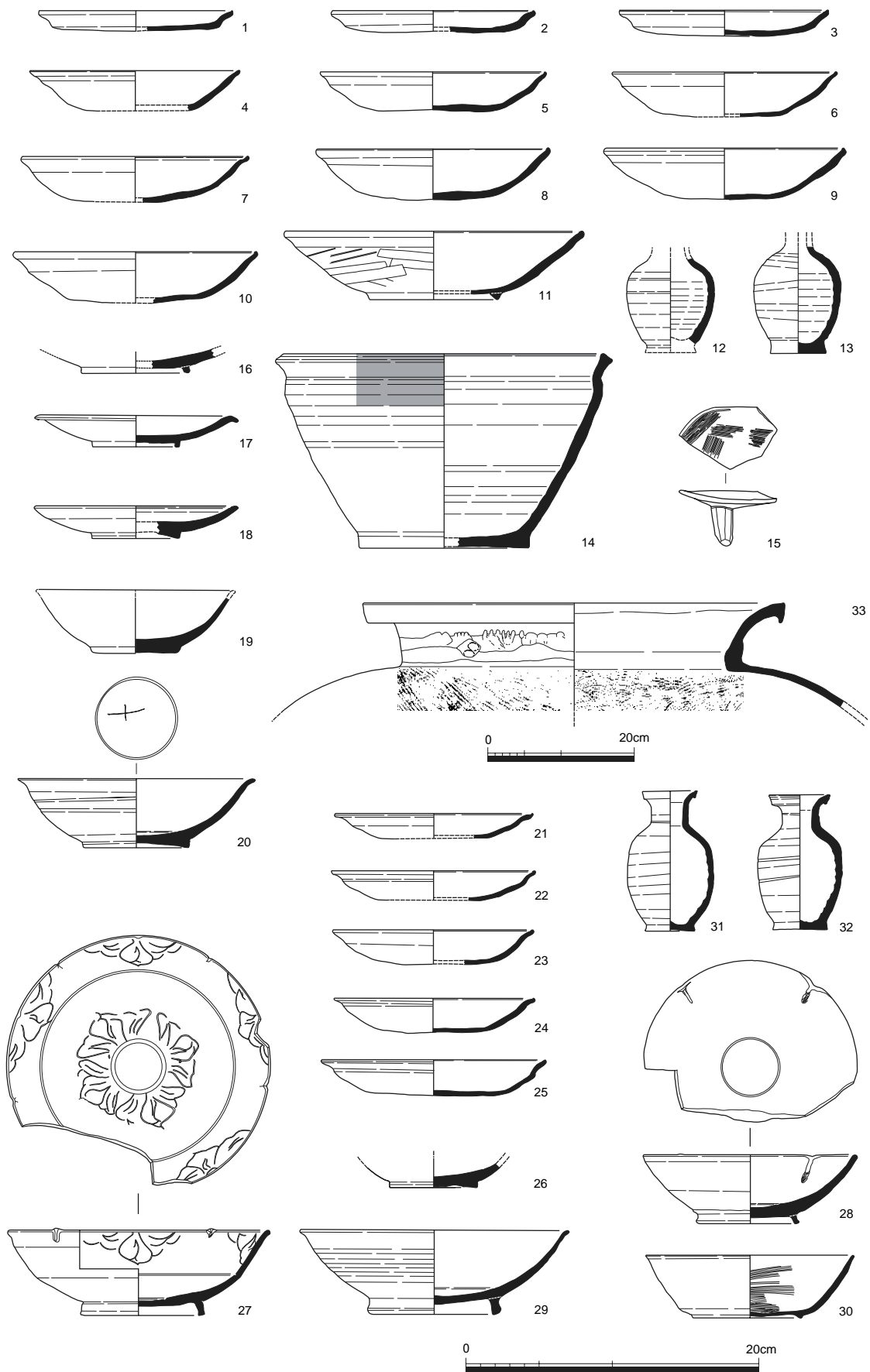


图10 L区出土遺物実測図(SE80 : 1~20 SE140 : 21~33)

頃まで遡るものである。またSD109下層からは9世紀前半(新)の土師器が出土している。

特出できる遺物としては、SE140の井鎮に使われた完形の瓶子2個体と共に出土した猿投産の緑釉陶器陰刻花文輪花椀・緑釉陶器輪花椀がある。また、SE80では京都産の緑釉陶器椀、黒色土器の風字硯、白色土器の皿がある。石製品では第2層から石帯が出土している。瓦類では土壌SK179(建物SB3の柱穴)から鴟尾片、第1層から緑釉瓦片1点、P193から重郭文軒平瓦、第1層から蓮華文軒丸瓦が出土している。木製品では井戸SE80の曲物内最下層から櫛が出土している。

ここでは、平安時代前期後半から中期前半期の土器がまとめて出土したSE80・140、SD109の土器類と、その他の遺構から出土した土器およびその他の遺物について概説を述べる。

SE80出土遺物(図10 - 1 ~ 20・図11 - 52・53)

土器類では土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器、木製品では櫛および井戸側に使用された曲物片等がある。

土師器(1~11) 1~3は皿Aタイプに属するもので、口径13.4~14.2cm、器高1.4~1.7cmある。口縁部は外反させて、オサエとナデ調整を施す。5~10は杯Aタイプに属するものである。口径14.4~16.8cm、器高2.7~3.5cmある。口縁部は外反し、端部は丸く上方に収める。調整手法は皿Aと同じく外面調整はオサエとナデを施したものである。4は磨滅が激しいが、体部外面と底部にヘラケズリの痕跡が認められるものであり、体部の形態から椀Aに分類しておく。11は高台付きの杯Bである。口径20.6cm、器高4.7cmある。体部下半からやや直線的に外方へ開く体部を持ち、口縁部は僅かに外反し、端部を内へ丸くおさめる。調整は口縁部の体部外面にヘラケズリを施し、口縁部にケズリ残しが見られる。高台は三角形のものを粗く貼り付けている。なお底部内面から体部にかけてハケメ調整痕が見られる。

須恵器(12~14) 12・13は瓶子である。調整は回転ナデを施し、体部下端はヘラケズリ後ナデを施す。底部には糸切り痕が顕著に認められる。14は「く」の字に屈曲する口縁部を持つ鉢で、内外面は回転ナデを施し、底部には回転ヘラ切り痕が残る。口縁部から体部上端の外面には焼成時の重ね焼きによる黒化が見られる。

黒色土器(15) 黒色土器Bの風字硯である。全体に磨滅が激しいが、内外面にヘラミガキ調整痕が見られ、

表2 SE80土器構成表

器種	器形	破片	内比率	総比率
土師器	杯椀皿	892	96.3%	84.8%
	高杯盤	9	1.0%	0.9%
	甕鍋釜	20	2.2%	1.9%
	その他	0	0.0%	0.0%
	不明	5	0.5%	0.5%
	小計	926	100.0%	88.0%
黒色土器	杯椀皿	7	41.2%	0.7%
	甕	8	47.1%	0.8%
	その他	1	5.9%	0.1%
	不明	1	5.9%	0.1%
	小計	17	100.0%	1.6%
須恵器	杯椀皿	25	40.3%	2.4%
	壺瓶	9	14.5%	0.9%
	鉢	18	29.0%	1.7%
	甕大壺	6	9.7%	0.6%
	その他	0	0.0%	0.0%
	不明	4	6.5%	0.4%
	小計	62	100.0%	5.9%
緑釉陶器	杯椀皿	41	100.0%	3.9%
	壺瓶	0	0.0%	0.0%
	その他	0	0.0%	0.0%
	不明	0	0.0%	0.0%
	小計	41	100.0%	3.9%
白色土器	杯椀皿	5	100.0%	0.5%
	高杯盤	0	0.0%	0.0%
	盤	0	0.0%	0.0%
	その他	0	0.0%	0.0%
	不明	0	0.0%	0.0%
	小計	5	100.0%	0.5%
灰釉陶器	杯椀皿	1	100.0%	0.1%
	壺瓶	0	0.0%	0.0%
	その他	0	0.0%	0.0%
	不明	0	0.0%	0.0%
	小計	1	100.0%	0.1%
総数		1052	100.0%	

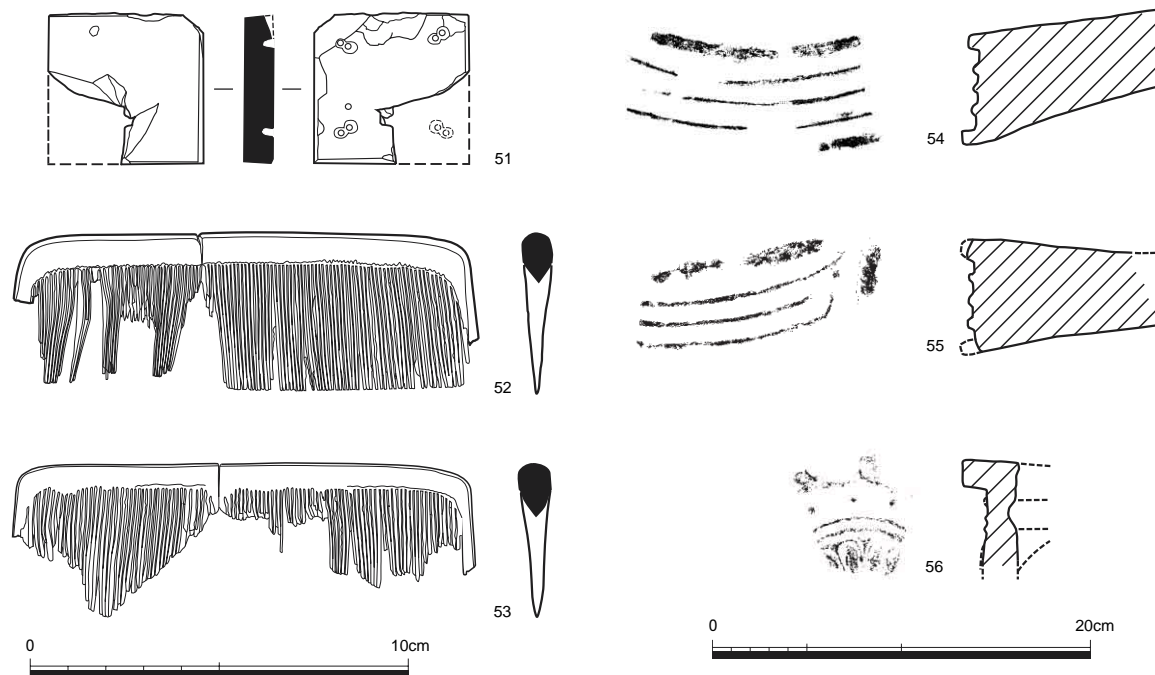
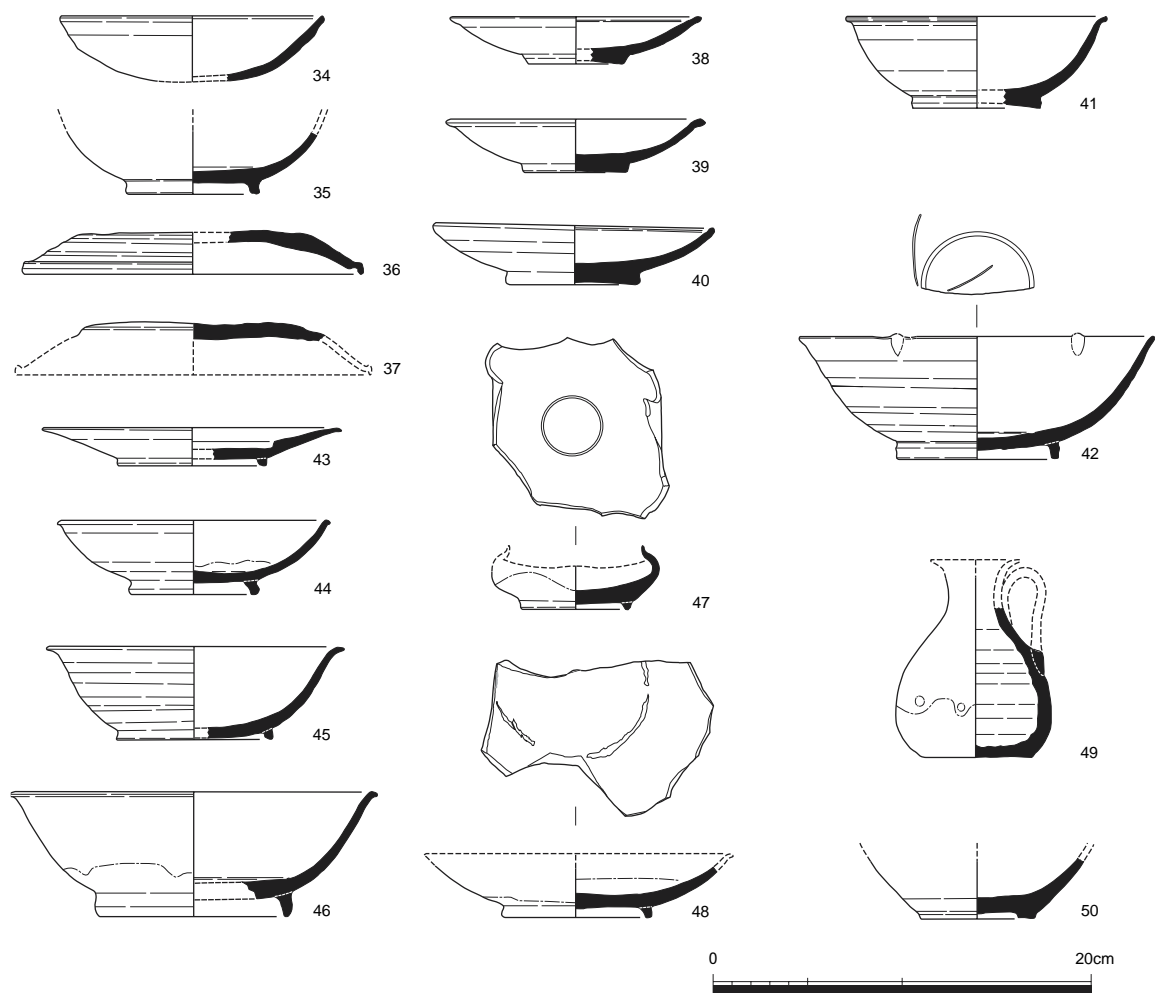


图11 L区出土遺物実測図(SD109: 34~36 SK39: 37 P52: 38·49 P59: 39 P207: 44 P171: 45
P115: 48 SD15: 41 平安整地第2層: 40·42·43·46·47·50·51·54~56 SE80: 52·53)

内面には口縁部すぐ下端に沈線が見られる。脚部はケズリを施した端面を7面有する。

灰釉陶器(16) 皿である。淡灰色の良質な胎土で、内面に灰オリーブ色の釉を刷毛塗りによって施す。輪高台で丸みを持った角高台が貼り付けられており、猿投窯編年によるK-14型式に属するものである。

白色土器(17) 皿である。胎土はくすんだ浅黄橙色を呈し、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部はやや下方に垂れ気味に下がる。ロクロ成形された後に内外面には密なヘラミガキが施される。底部はケズリ出しの輪高台が付く。なお口縁部の内外面には煤が付着する。

緑釉陶器(18~20) 18は軟質の山城産緑釉陶器皿である。磨滅しているが、緑黄色の釉が全体に施される。口縁部内面に1条の沈線が巡る。底部はケズリ出しの蛇の目高台が付く。19は軟質の山城産緑釉陶器椀である。磨滅しほとんど釉が剥離しているが、平高台が付く。20は硬質の小塩産緑釉陶器椀である。刷毛塗りで暗緑釉の釉が全体に施される。形態は内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。底部は平高台が付く。ヘラミガキ調整は省略されており、底部内面には1次焼成時の重ね痕が残り、中央部には「×」字状のヘラ記号がある。

横櫛(52・53) 平面形は長方形を呈し、52は僅かながら背に膨らみを持たせるものであり、53はやや直線的な背を持つ。背と側縁との肩部角度は丸みを持ち、95度の角度を呈する。

SE140出土遺物(図10-21~33)

土器類では土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・輸入青磁、木製品では薪などが出土した。

土師器(21~25) 21~24は皿Aタイプに属するものである。口径13.4~14.0cm、器高1.7~2.3cmある。口縁部は外反し、端部は丸く上方に収める。調整手法はオサエとナデを施す。25は杯Aタイプに属するものである。口径15.4cm、器高2.5cmある。口縁部は外反し、端部は丸く上方に収める。調整手法は皿と同様で、皿・杯ともにSE80のものより器壁が薄くなる。

緑釉陶器(26~28) 26は山城産の緑釉陶器椀で、硬質で灰黄色の良質な胎土である。底部には蛇の目高台が付く。施釉は刷毛塗りで、淡緑灰色の釉を体部内外面に施す。底部内面には1次焼成時の重ね痕が、底部外面には2次焼成時トチンの痕跡らしきものがある。27は猿投産の緑釉陶器陰刻輪花稜椀で、胎土は硬質で淡灰色を呈する。底部にはやや内へ内湾気味の断面長方形の貼付高台を有する。体部は高台から緩やかに立

表3 SE140土器構成表

器種	器形	破片	内比率	総比率
土師器	杯椀皿	349	91.6%	65.1%
	高杯盤	15	3.9%	2.8%
	甕鍋釜	11	2.9%	2.1%
	その他	0	0.0%	0.0%
	不明	6	1.6%	1.1%
	小計	381	100.0%	71.1%
黒色土器	杯椀皿	23	100.0%	4.3%
	甕	0	0.0%	0.0%
	その他	0	0.0%	0.0%
	不明	0	0.0%	0.0%
	小計	23	100.0%	4.3%
須恵器	杯椀皿	11	13.4%	2.1%
	壺瓶	8	9.8%	1.5%
	鉢	5	6.1%	0.9%
	甕大壺	57	69.5%	10.6%
	その他	0	0.0%	0.0%
	不明	1	1.2%	0.2%
	小計	82	100.0%	5.9%
緑釉陶器	杯椀皿	15	75.0%	2.8%
	壺瓶	3	15.5%	0.6%
	その他	0	0.0%	0.0%
	不明	2	10.0%	0.4%
	小計	20	100.0%	3.7%
灰釉陶器	杯椀皿	28	96.6%	5.2%
	壺瓶	1	3.4%	0.2%
	その他	0	0.0%	0.0%
	不明	0	0.0%	0.0%
	小計	29	100.0%	5.4%
輸入青磁	杯椀皿	1	100.0%	0.2%
	壺瓶	0	0.0%	0.0%
	その他	0	0.0%	0.0%
	不明	0	0.0%	0.0%
	小計	1	100.0%	0.2%
総数		536	100.0%	

ち上がり、体部中央部で内へ緩く屈曲して稜を持ち、僅かに内湾しつつ口縁部端部は外反する。規模は口径17.8cm、器高5.9cmあり、施釉は刷毛塗りで、透明感のある淡黄緑色の釉を全面に施している。調整は内面をナデ、外面を口縁部直下までヘラケズリで調整した後に内外面共にヘラミガキ調整を施す。特に内面には密なヘラミガキを施す。口縁部の輪花は外からヘラで軽く内へ押さえたものが現状では4単位あり、5単位に復原できるものである。陰刻花文は口縁部と底部内面に施されている。口縁部は半載花文の花弁中心を端部に据えたもので花弁の下には屈曲部に沿って沈線が巡る。底部内面にも径3.6cmの沈線が巡り、その周りに4弁からなる全形花文が施される。28も猿投産の緑釉陶器輪花椀で、胎土は乳白色で軟質で焼成は甘い。底部には外に張り気味で端面が少し肥厚する断面長方形の貼付高台を有する。規模は口径14.6cm、器高4.7cmあり、施釉は刷毛塗りで、淡緑黄色の釉を全面に施している。調整は口縁部内外面をナデ、外面は体部下半部をヘラケズリで調整を施す。ヘラミガキ調整は内面に僅かに見られる程度である。口縁部の輪花は外から口縁端部をほんの僅か内へ指頭圧を加え、内面に縦に細長く粘土帯を雑に貼り付けている。底部内面には径4cmの沈線が巡る。また、沈線上にトチン痕が1箇所、底部外面にも1箇所確認できる。

灰釉陶器(29) 猿投産の灰釉陶器椀で、胎土は淡灰色で硬質である。底部にはやや肥厚気味で断面三角形の貼付高台を有する。体部は高台から内湾しながら立ち上がり、口縁端部を僅かに外反させる。規模は口径18.4cm、器高5.8cmある。施釉は刷毛塗りで施釉を施すが釉はほとんど発色していない。調整は口縁部内外面をナデ、体部下部をヘラケズリで調整し、後ナデを施す。

黒色土器(30) 黒色土器Bの椀で、胎土は赤褐色を呈する。底部には三角形の貼付高台を有する。体部は底部から強く上方へ内湾しながら直線的に口縁部へ立ち上がる形態を呈し、規模は口径14.2cm、器高4.3cmある。調整は底部内面から口縁部下方までヘラミガキ調整が施され、外面は体部中位にヘラケズリ痕が残り、口縁端部の直下までケズリを施す。また外面全体には焼成で黒色化しなかった部分に黒漆を施釉しているかのように思わせる部分が見られる。

須恵器(31～33) 31・32は瓶子で完形品である。調整はナデを施し、体部下端はヘラケズリ後ナデを施す。底部には糸切り痕が顕著に認められる。33は大型の甕の口縁部で、口径は58cmある。口頸部は強く外反し口縁端部下端は下方に垂れ下がる。調整は口縁部内面が木コテでナデを施し、外面も木コテで叩くように成形した後に粗くナデを施している。体部内面には同心円文、体部外面には平行タタキが残る。

薪 図示はしていないが、底面直上で薪と考えられる木片が2個体出土した。両端は焦げている。各々幅5cm・長さ30cm・幅3cm・長さ15cmある。

以上SE80・140の出土土器について述べてみた。SE140の土師器杯・皿類は、SE80のものに比べると器壁が薄くなる傾向にあり、口縁部の外反が強くなるものが主体を成すことや、SE140の緑釉陶器の形態的特徴などから、SE140の時期は、10世紀初頭(新)、SE80の時期は、9世紀中頃(古)と考えている。なお、SE80の出土土器全体の観察によると、僅かではあるが期新に入る皿A類の破片もある。

SD109出土遺物(図11 - 37 ~ 51・54 ~ 56)

土器類では土師器・須恵器・緑釉陶器などがある。

土師器(34) 椀Aタイプに属するものである。

緑釉陶器(35) 東海系産の緑釉陶器椀である。刷毛塗りで淡緑黄釉色の釉を高台内の一部を除き全体に施釉する。内面に第1次焼成時の重ね痕が残り、底部には糸切り痕が残る。高台は貼付け高台を有する。

須恵器(36) 杯蓋で、口縁部は屈曲して端部が下方に突出し、天井部は平坦でツマミは付かない。調整は口縁部をナデ、天井部はヘラオコシ後にナデを施す。

その他の遺構出土遺物(図11 - 37 ~ 56)

土壌・柱穴・整地層から出土した土器類・瓦類・石製品について述べる。

須恵器(37) 須恵器杯蓋で硯に転用され、内面に墨が付着する。口縁部は欠損し天井部は平坦でツマミは付かない。調整は口縁部をナデ、天井部をヘラオコシ後にナデを施す。

緑釉陶器(38 ~ 42) 38はP52から出土した山城産の緑釉陶器皿である。平高台を有する。内面の口縁端部下方に1条の沈線が巡り、釉は剥離している。39はP59から出土した山城産の緑釉陶器皿である。高台底部以外に淡黄緑釉を施す。平高台を有する。40は第2層から出土した山城産の緑釉陶器皿である。僅かに釉が発色している程度で、ほとんど素地に近いものである。外面は口縁下方までヘラケズリ調整が施され、内面口縁端部下方に沈線が巡る。平高台を有する。41は近現代の暗渠SD15に混入し出土した山城産の緑釉陶器素地である。調整は口縁部内外面にナデを施す。外面は体部中位上方までヘラケズリが施されている。高台はケズリ出し蛇の目高台を有する。42は第2層から出土した猿投産の緑釉陶器輪花椀である。緑黄色の釉を刷毛塗りで全釉する。形態は緩やかに内湾しながら、口縁部は僅かに外反する。輪花は2単位の痕跡が見られ、内面には粘土帯を貼付けた痕跡が1単位ある。調整は口縁部内外面にナデを施し、外面は体部中位上方までヘラケズリが施される。内面底部中央には径約6cmの沈線が巡り、第1次焼成時の重ね痕が残存する。高台は断面が長方形の貼付け輪高台中位で、僅かに内へ屈曲する。

灰釉陶器(43 ~ 49) 43は第2層から出土した猿投産の段皿である。緑灰色の釉を刷毛塗りで内面底部に施す。体部は大きく外反して開き、口縁に至る。内面には明瞭な段を持つ。調整は口縁部内外面をナデ、外面体部中位から下方をヘラケズリを施す。高台は断面方形の丸みを持った貼付け輪高台を有する。47は第2層から出土した猿投産の灰釉陶器耳皿である。相対する口縁部を内へ折り曲げ、端部は波状になるもので、刷毛塗りで淡緑灰色の釉を内面と外面口縁部まで施釉する。高台は短く、丸みを持った台形状の貼付け高台を有する。48はP115から出土した東海系灰釉陶器皿で、硯として転用される。底部内面と外面を除き刷毛塗りで淡緑灰色の釉を施釉するが、あまり発色していない。底部内面には重ね痕と墨痕が残存している。高台はやや外に張り出し、断面台形の丸みを持った貼付け輪高台を有する。44はP207から出土した猿投産の灰釉陶器椀である。刷毛塗りで淡緑灰色の釉を体部内面に施釉する。調整は口縁部内外面をナデ、外面体部中位から下方をヘラケズリを施す。高台は断面三日月形に近い丸みを持った貼付け高台を有する。45

はP171から出土した猿投産の灰釉陶器椀である。刷毛塗りで淡緑灰色の釉を底部内面に粗く施釉する。一部口縁部にも施釉が見られるが自然釉かどうかははっきりしない。調整は口縁部内外面を回転ナデ、外面体部中位から下方をヘラケズリが施されている。高台は内傾する丸みを持った台形の貼付け輪高台を有する。46は第2層から出土の東濃系灰釉陶器椀である。刷毛塗りで緑灰色の釉を内面体部と外面体部下方まで施釉する。調整は口縁部内外面をナデ、外面は口縁部下方までヘラケズリが丁寧に施されている。高台は重ね痕の釉が付着し、三日月形のやや高い貼付け輪高台を有する。49はP52から出土した東海系の灰釉陶器の取手付き長頸瓶である。取手と頸部は欠損している。施釉は体部下方まで刷毛塗りで施す。調整は外面はナデ、底部はヘラオコシの痕跡がある。

輸入青磁(50) 第2層から出土した青磁椀である。体部上半は欠損しているが、外上方へ直線的

表4 遺物概要表

L 区					
時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代前期～中期後半	土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・白色土器・輸入青磁・輸入白磁・軒丸瓦・軒平瓦・鴟尾・石帯・金属製品・櫛・曲物・木片	61	土師器16点・須恵器9点・緑釉陶器12点・灰釉陶器9点・白色土器1点・石帯1点・櫛2点・軒丸瓦1点・軒平瓦2点・墨書土器2点	54	0
室町時代後期		0	0	0	0
江戸時代後期	焼締陶器・染付・施釉陶器(京焼)	1	0	0	1
	計	62	55	54	1

K 3区					
時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代中期	土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・輸入青磁・輸入白磁	2	0	2	0
室町時代後期	土師器・瓦器・施釉陶器(美濃瀬戸)・焼締陶器(信楽・丹波)・輸入青磁・輸入白磁・瓦・銭貨	5	0	5	0
江戸時代後期	染付・施釉陶器(京焼)	1	0	0	1
	計	8	0	7	1

M 区					
時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代中期	土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・輸入青磁・輸入白磁・瓦	3	0	3	
室町時代後期	土師器・瓦器・施釉陶器(美濃瀬戸)・焼締陶器・輸入青磁・輸入白磁・輸入青白磁	2	0	2	
江戸時代後期	焼締陶器・染付・施釉陶器(京焼)	1	0	0	1
	計	6	0	5	1

に開くものと思われる。施釉は全面施釉の後に高台の釉を力キ取る。高台は断面が方形のやや幅が広くて短い高台を有する。高台には貝目のメアトが残存し、周囲が赤褐色に発色している。

石製品(51) 第2層から出土した巡方の石帯である。石材は黒色のサヌカイトを使用し、矩形の石板の四方を面取りし、断面は台形を呈する。形態はほぼ正方形に近く、長辺4.2cm、短辺4.0cm、厚さ0.8cmある。表面は丁寧に研磨され、裏面四隅には放射状に潜り穴を配している。

瓦類(54～56) 54・55は重郭文軒平瓦である。54は郭線断面は丸く、重郭内にさらに一条の弧線を配する。顎は直線顎である。調整は瓦当部凹面がヨコケズリ、顎部凸面がヨコナデを、平瓦部凹面は不定方向にナデ、凸面に縦方向の縄タタキを施す。55の調整は54と同様であるが、平瓦部の縄タタキは不明である。共に奈良時代の軒平瓦である。56は複弁蓮華文軒丸瓦である。複弁で蓮弁は盛り上がり、子葉がある。間弁はY字型で、界線を2条巡らせる。外区には珠文を配するが、蓮子数は不明である。瓦当部裏面に丸瓦をはめ込んだ痕跡が残存する。

なおL区においてはSE80・SE140の出土土器破片計数表を資料として作成しておいた。

5 . まとめ

1997年から始まった都市計画道路御池道改良工事(御池通拡幅工事)を原因とする右京三条一坊の調査も5次を数え、これまでに七町、十町、十五町を対象にした発掘調査で多くの成果を挙げた。また東隣の右京三条一坊二・三・六・七町では朱雀大路・右京職・穀倉院などに関連する遺構などが検出されるなど、右京三条一坊の遺跡の状況が明らかになりつつある。

今回の調査地は、東が右京三条一坊十町、西は三条一坊十五町の2町域が対象となっており、四行八門では十町北八門と十五町北八門に位置する場所であった。

十町(L区)の調査では建物跡を含む多数の柱穴、井戸、排水溝等を検出し、これまでの調査では復原に至らなかった町内の建物配置の一部を復原することができた。前年度調査で明らかになった十五町内に比べると、1町東に位置する十町内では建物がひんぱんに建て替えられたことを明らかにした点は、今回の調査における最も重要な成果であると言える。

細部に注目すると、SD109は平安時代前期前半に属する遺構であり、この場所が平安京造営後まもなくして宅地として利用されたことが判明した。溝全体に9世紀前半から後半期の遺物が多く含まれており、主体を成すのが前半期の遺物である。この溝は一戸主を東西・南北方向ともにさらに細分する位置にあり、建物に付属した溝であるとも考えられるが、この溝に併行する時期の建物は未検出であり不明である。この溝は9世紀中頃には埋められ、溝を伴わない宅地利用へと移行し、新たに建物SB2・3が建てられたと想定される。この頃、SE80も造られたと考えている。9世紀後半から10世紀にかけて、新たにSB1およびSE140が造られた。

また土器に関しては、L区から9世紀後半期から10世紀にかかる土師器、緑釉陶器、灰釉陶器などが多数出土した。中でも灰釉陶器は、緑釉陶器に迫る破片数を占めること、緑釉陶器では東海系の緑釉陶器が多数の破片数を占めていることも判明し、平安時代前期から中期にかけては、

東海方面から土器が多量に搬入されていたことが明らかになった。

十五町(K - 3区)の調査では、想定していた西大宮大路の東側溝と築地は前調査同様に検出できなかったが、その南北築地想定中心線に沿って室町時代後半期の溝が検出され、中世においても条坊宅地割りを踏襲して溝を作っていたことが明らかとなった。西大宮大路は平安時代から室町時代後半期頃まで河川の氾濫等による削平、攪乱を受けながらも路面としての機能を果たしていたことも前調査と同じく明らかにすることができた。

今後、この周辺での調査成果を蓄積、分析することにより右京三条一坊の歴史的変遷がより明らかになっていくものと考えられる。

註

- 1)吉村正親「平安京右京三条一坊4」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所1999
- 2)伊藤 潔「平安京右京三条一坊2」『平成10年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所2000
- 3)小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所1996

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうさんじょういちぼうじゅう・じゅうごちょうあと							
書 名	平安京右京三条一坊十・十五町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2001 2							
編著者名	大立目 一							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2002年 月 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
へいあんきょうせき 平安京跡 右京三条一坊十・ 十五町	きょうとしながざょうくに 京都市中京区 しのきょうふなつかちょう 西ノ京船塚町 ほかちない 他地内	26100		35度 00分 50秒	135度 44分 40秒	2001年6月 4日～2001 年8月24日	240㎡	道路敷設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡	都城	平安時代前期から平安時代中期	建物・溝・井戸・土壙	土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器・輸入青磁・輸入白磁・軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鴟尾・木製品・石製品		平安京跡右京三条一坊十・十五町跡で平安時代前期から中期の建物・溝・井戸などを検出した。		
		室町時代後期	整地土層・溝・柱穴	土師器				
		江戸時代	土取穴	土師器・陶器・磁器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-2

平安京右京三条一坊十・十五町跡

発行日 2002年 5 月31日

編集 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷

住所

〒

(075)